

現代中国の結納金と結納品の事情について

丹野 健一郎

第一工科大学 東京上野キャンパス (〒110-0005 東京都台東区上野7-7-4)

About engagement money and engagement gifts in modern China

TANNO KENICHIRO

Tokyo Taito-word Ueno 7-7-4 DIT Tokyo - Ueno campus

Abstract: First, engagement money and engagement gifts are a custom related to marriage that exists not only in Asia but also in some parts of the world. In this context, we will summarize the history and current situation regarding dowries in China in the Asian region. Finally, I would like to look into the future regarding engagement money and engagement gifts in China.

Key words: China ,engagement money ,engagement gifts

1. はじめに

まず、結納金と結納品は、アジアだけでなく、世界の一部地域にも存在する結婚に関する風習である。その中で、アジア地域における中国の結納金と結納品について、その歴史、および、現状を整理する。さらに、中国の結納金や結納品について、今後の課題についてまとめたい。

2. その歴史について

現在、中国の56の民族のうち、その9割を占める漢族の結婚に関する伝統としては、今から二千年以上も昔にあったとされる周の時代に始まった『儀礼』のなかに「六礼(りくれい)」という、結婚に関する6つの約束事がある。それは、納彩(のうさい)、問名(もんめい)、納吉(のうきち)、納徴(のうちょう)、請期(せいぎ)、親迎(しんげい)というものである。現在の中国は、男女平等と迷信打破の考えから、この6つの約束事は、問名と納吉が省略された4つになっているのが一般的である。

次に(図1)に、六礼について、簡単にまとめたものを示す。

(図1) 六礼についての略図

読み方	その意味
のうさい 納彩	男性の父親、または代理人が結婚の申し込みをすること。また、結納を納めると解釈する場合もある。なお、彩は采と書くこともある。
もんめい 問名	女性の旧暦による生年月日と生まれた時間帯を紙に書いてもらうこと (現代は省略)
のうきち 納吉	占い師が二人の結婚の可能性について、門名で得た情報をもとに占うこと (現代は省略)
のうちょう 納徴	新郎が現金と贈り物を新婦の両親に贈る。また、新婦も同じように贈り物をするところがある。納幣(のうへい)、彩礼の由来ともいう
せいぎ 請期	新郎新婦の旧暦の生年月日と生まれた時間帯をもとに占い師が結婚式の日を選ぶ、偶数日が選ばれることが多いこと
しんげい 親迎	結婚式当日に新郎が新婦を迎えに行く儀式のこと

(※筆者による作成)

3. むかしの中国といまの中国の「親迎」について

六礼の中で、新郎や新婦の周囲の人への広報的な大きな役割もあるのが「親迎」という儀式である。たとえば、『清院本清明上河図』(写真1)に描かれた「親迎」を描いた部分がある。これは、統一された服装をした楽隊やきれいに装飾され、結納品を載せた台車や花嫁専用の輿を従えた長い隊列で新婦を迎えに行くところを描いた部分である。日本でいえば、江戸時代の参勤交代で登場する大名行列のような長い隊列であればあるほど、新郎側の財力を誇示し、その地域の人たちにとっては、一種のエンターテインメント的な要素があったと見ることもできるだろう。

(写真1)『清院本清明上河図』の一部



写真出典：清院本清明上河図 故宮博物院所蔵
<https://theme.npm.edu.tw/exh105/RiverQingming/jp/index.html> (2024年3月30日閲覧)

次に、現代中国の「親迎」(写真2)の例のひとつを紹介する。新郎側の家族が集めた乗用車の列だけでなく、同じ色で合わせた同一車種、あるいは、イベント会社からリースした中国では縁起の良い数字である6や8や9の数字が並んだナンバープレートが付いた乗用車、さらには海外から輸入した超高級外車が生花やリボンで華やかに飾り付けられ、長い列になって新婦の家に迎えに行くところである。

過去に中国で在住していた筆者の実際の体験からすると、中国の結婚式の多くは、現代中国の社会情勢に合わせて、一族が集まりやすい毎年の春節近く、あるいは、大型連休が予定されている5月の労働節(メーデー)前後や10月の国慶節(中国の建

国記念日)の頃には中国国内は、比較的天候にも恵まれることから、結婚式のピークとなり、各都市で以下のような長い自動車の隊列を見かけることが多かった。

また、この時期は、結婚を迎える家族だけでなく、関係者の出費も重なる頭の痛い時期でもある。

(写真2)現代中国の「親迎」の例



写真出典：花嫁を迎える自動車の列 合肥婚礼
<https://www.sanyefengji.cn/qichezatan/340158.html>
 (2024年3月31日閲覧)

4. いわゆる結納品について

たとえば、中国の旧社会における婚姻を紹介したもののなかで、中国山西省永濟市歴史文化研究センター(出典：https://mp.weixin.qq.com/s?__biz=MzAwMzgxNzkyMw==&mid=2656679571&idx=3&sn=dd5a823ce0dbad72acd3e76ef5efbd08&chksm=80987e3fb7eff72948ddc8e323cda4e84801a1265deb3f000ceec09df2b8d27f36d0934d61af&scene=27 結婚式の風習における「結納の変遷」について 永濟市歴史文化研究中心 2024年3月31日閲覧)によると、以下のように紹介されている。(※翻訳は筆者による)

……いわゆる解放前(1949年の中華人民共和国建国前のこと※筆者注)に、人々が納彩と呼ぶのは、小麦、粟、綿花、手織布、布団などの実用品が多く、金持ちと貧乏人では、その差はかなり大きかった。

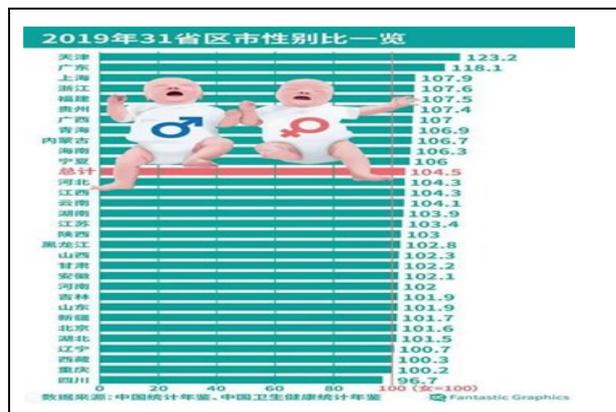
よって、この内容から判断すると、中国の地方によっては、納彩の時に、多くの結納品を準備しなけ

ればならないことがうかがえる。さらに、中国の建国以降は、計画経済などの事情から国内の経済発展が停滞し、人々の生活物資の不足が問題となったことから、例えば、都市部の工場に勤める若い男女が結婚する際には、いわゆる「手表、縫纫机、自転車（腕時計、ミシン、自転車をさす※筆者注）」といったもの、あるいは「冰箱、彩电、洗衣机（冷蔵庫、カラーテレビ、洗濯機をさす※筆者注）」といった当時の中国の都市部の工場労働者の一般家庭の水準からすると、もはや「ぜいたく品」と呼べるような「結納品を準備しなければ結婚の話が進まない」というようなこともあった（Aさんの家族からの情報提供）という。そして、結納品を受け取った場合は、結婚を許諾したものとみなされるため、経済的な弱者の場合、結婚そのものをあきらめるか、あるいは、その準備をする新郎側の負担は相当大きいと言わざるを得ないだろう。

なお、「なぜ、結婚式における新郎側の経済的な負担が多いか」ということについては、筆者が中国在住中、度々、筆者の周囲の中国人たちに聞いたところでは、「地方によっては、結婚費用を新郎側に負担してもらうことで、家族が一人減るという新婦側家族の精神的、経済的な補償となること、あるいは、新婦が経済的に困らない家庭に嫁ぐことを周囲に示すため（Aさん、Bさん）」という意見が非常に多かった。しかし、一方では「結婚費用を借金で賄うため、結婚後、その借金の支払いに苦勞する新郎側の家庭もある（Cさん）」という指摘もあった。ここで筆者が感じることは、多くの中国人にとって、「結婚に多くの費用をかけることをよしとする思考」が強くあることが言えるのではないだろうか。

さらに、現在の中国では（図2）男女の人口比率では、女子の出生100に対して、沿海部の地域では男子の出生が123（天津）や118（広東）をこえるため、圧倒的に「男余り」となり、自然と女性優位で結婚式の準備が進むと言ってもいいだろう。

（図2）2019年31省区市の性別比一覧



出典：2020年新生児データ公布男女の比率がアンバランスになっている 学校教育ネット
cn.chinagate.cn/population/2012-03/29/content_25016550.htm
 (2024年4月1日閲覧)

次に、現代の結納品については、その代表的な中国語の言葉があるので紹介したい。それは、「車子（チャーズ）、房子（ファンズ）、票子（ピャオズ）」という言葉である。その意味するところは、「車子」は自動車のことであり、「房子」は持ち家、「票子」とは現金（または収入）のことである。これは、現代中国の一面を示す非常に端的な言葉である。まずは、自動車については、中国では常に移動の手段として自動車が使われることが多くなってきているため、日本円換算で300万円から500万円程度の乗用車をオートローンで購入する新郎側の家庭が多い。もちろん、一部の裕福な家庭では、日本円換算で500万円以上もする高級な乗用車を新婚夫婦に用意する家庭もある。次に、持ち家については、親の所属する「単位（ダンウェイ）」と呼ばれる勤務先の福利厚生の内容によっては、たとえば、夫婦2人が別々に住居の提供、または市場価格よりも安い価格で優先的に購入できる住居を勤務先から提供されることもあるため、それを新郎新婦のために贈与する家庭もある。しかし、近年は、都市の再開発や不動産価格の高騰により、もともとは都市中心部にあった自宅を売却した際に、その一部を頭金として郊外にある集合住宅の購入費用に充てることにより、持ち家を実現するという新郎側の家庭が多い（Bさんの家族からの情報提供）らしい。よって、経済的な条件に恵まれない家庭にとっては、いわゆる「車子（チャーズ）、房子（ファンズ）、票

子（ピャオズ）」を用意するのは、決してたやすいことではないといえるだろう。なお、以下（図3）に時代ごとの結納品を大まかに整理したものを載せる。

（図3）時代ごとの結納品の例

年 代	主な結納品
～40年代	食べ物、家具、布類
50,60年代	腕時計、ミシン、自転車
70,80年代	冷蔵庫、カラーテレビ、洗濯機
90～現代	自動車、持ち家、現金（収入）

（※作成は筆者による）

票子（現金）にあたる結納金については、次項で説明する。

5. いわゆる結納金について

いわゆる中国の「解放前」と呼ばれる旧社会においては、結納金は結婚式の費用と呼ぶよりは、新婦側の両親に対する経済的な補償という側面もあると言わざるを得ない。なぜならば、中国語の表現に「买卖婚姻」（マイマイホンイン）があり、その意味するところは、男性が新婦となる女性の家庭に代金を払うというスタイルである。もちろん、旧社会においては、現代のような社会保障システムがないため、新婦の両親からすれば、貴重な労働力の喪失などにもつながるため、その代償として金品を受け取るという理屈に無理はない。また、中国的な考えの一つである「传宗接代」（チュアンゾンジェダイ）に代表される「子孫が代々家を継ぐ」という伝統を維持するためにも必要であったと思われる。しかし、近年の中国では、行き過ぎた「結納金」の問題が発生している。たとえば、2024年4月25日の北京青年報の記事（参考 <https://new.qq.com/rain/a/20240425A08TG800> 結納は儀式的に戻すべきだ 社会的な合意形成が必要 北京青年報公式アカウント 2024年3月31日閲覧）によると次のように紹介されている。（※翻訳は筆者による）

……高額な結納金に対処するため、各地では多くの政策が出され、その対応がなされている。たとえば、甘肅省定西市では、結納金は5

万元を超えないという方針で地域内の結婚式を指導している。

筆者の卒業生で現在、中国在住（Dさん、Eさんなど）たちによれば、2024年2月現在、中国の沿海都市部の結納金の相場が20万元（1元≒20円で計算。日本円で400万円程度）前後ということなので、経済発展の途上にある中国内陸部の甘肅省内で5万元（日本円で100万円程度）の金額は決して安い金額ではないが、中国の地方政府が地元住民の結納金の金額に制限をもうけなければならないほど、中国国内では結婚にかかる費用全体の高騰が進んでいることがうかがえる。なお、実際には「結婚式の当日の花嫁を迎える親迎に際し、新婦側から更に結納金の加算を要求されることもある」（Dさん）という。

6. 今後の課題

本来、結婚式は、新郎新婦だけでなく周囲にとってもめでたいものであるはずだが、近年の物価の高騰だけでなく、中国の伝統的な価値観である「面子（ミエンズ）」（体面を気にする※筆者注）と「攀比（パンビィ）」（他人と競い合う※筆者注）により、「自分の体面のために他人と競い合うこと」が中心となり、結婚の当事者たちは冷静で合理的な判断ができないほどになってきている。その結果として、ついには中国の行政当局が結婚費用に関するガイドラインを策定し、制限を設け改善をはかることはよいことなのかもしれない。しかし、一方では、新たな問題が発生している。たとえば、中国政府は「国際結婚のための仲介機関を作ってはならない」と国務院（日本の内閣府に相当※筆者注）が「国務院弁公庁国際結婚の管理を強化する通知」（出典：https://www.gov.cn/xxgk/pub/govpublic/mrlm/201012/t20101202_63010.html 国務院弁公庁国際結婚の管理を強化する通知 中華人民共和国国務院弁公庁 2024年4月1日閲覧）を1994年12月6日に出しているにもかかわらず、中国では闇で海外からの花嫁を紹介する結婚相談所の存在に発するトラブルが絶えない。

それは、結婚の機会に恵まれない中国国内の男性のために、中国の隣国でもあり、生活習慣の似たベトナムからベトナム人の未婚女性を紹介するということから発生した福建でのトラブル（出典：<https://www.chinacourt.org/article/detail/2021/08/id/6236704.shtml>

ベトナム人妻を違法に紹介したが、全額返金を受けられなかった 中国裁判所ネット 2024年4月1日閲覧）を紹介する。（※翻訳は筆者、なお、一部省略した。）

……被告コ氏はベトナム人妻を紹介するという名目で、原告ガオ氏に9万6千元の手数料を請求したとされるが、その後、被告が紹介したベトナム人女性は婚姻届を提出するための書類を入手するためベトナムに帰国するという名目で出国し、結局は戻ってこなかったという。原告と被告は2018年の旧暦5月に書面による合意書に署名した……。

さらに、(注) ベトナムへ中国人の男性が新婦を探しに行った結果、裁判沙汰となったという河北省のニュース（出典：https://m.thepaper.cn/baijiahao_27215973 裁判所で国際結婚にかかわる訴訟について 澎湃新聞 2024年4月1日閲覧）があったので、以下に紹介する。（※翻訳は筆者、なお、一部省略した。）

原告李某は高齢で未婚のため、被告楊某に連絡し、原告李某にベトナム人の花嫁を紹介するという理由で仲介手数料として17万5千元を払った。しかし、ベトナムで100日以上滞在して、ベトナム人女性とお見合いをしたが、良い結果を得られなかったため、仲介料の返還を求めた裁判となり、審理の結果、3万元が原告に支払われることとなった。

以上の内容から分かることは、いわゆる結納金の現行の相場であるとされる20万人民元（家庭の事情によって金額差がある※筆者注）よりも安い金額で花

嫁を紹介してもらおうという中国の男性の心理を巧みに突いたものであり、その金額も年を追うごとに上昇してきていることから、解決しなければならない課題といえるだろう。

7. おわりに

本稿のテーマについて調べてみようと思ったのは、自分がこれまでに指導してきた学生たちの中には、卒業後、または在学中に結婚し、家庭を持ち、さらには育児などにがんばっている在日外国人が増えてきたことからである。いわゆる結納金や結納品については、国や地域によって千差万別である。

その中で、在日外国人留学生の中で最も多い中国出身の若者については、現代になっても中国各地に伝わる伝統や格式に縛られ、結婚を予定している若い人には合わないローカルなルールもあると聞くことがある。さらに、本来であれば、結婚する二人のよき理解者であるはずの周囲の大人たち、たとえば、中国の故郷に住む親や兄弟姉妹、更には親戚の意向や大人たちの好き嫌いが二人の結婚に反映されることもあり、結果として困難な門出となることが予想されることから、結婚をあきらめたという話しも聞いたことがある。

確かに、現在の中国では地域によって結納金の金額について、その上限を設けるなどのガイドラインを示してはいるが、一方では、違法な手段によって発生した国際結婚に関するトラブルのような課題もあり、今後の進展に注目したい。

8. 謝辞

本稿の作成にあたり、2023年の年末から2024年の春節にかけて、現代の中国各地の結婚の状況について結納金や結納品の情報を提供していただいたAさん、Bさん、Cさん、および、過去において、私が指導したDさん、Eさんなど各位に厚く感謝を申し上げます。そして、個人を特定される恐れがあるため、また、個人情報保護の観点から、文中では氏名の表記はアルファベットとし、性別や具体的な出身地などを特定できないように配慮した。

なお、参考文献は文中で示した。